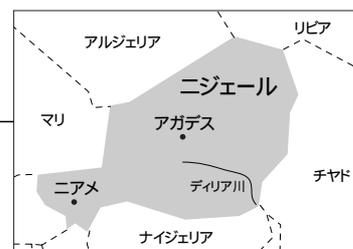


# ユニセフ 子ども物語

## 地球に生きる子どものくらし

Republic of Niger

### ニジェール共和国



# おとうさんのおみやげ



14歳になったばかりのマリアナは最近元気がありません。「とうとう学校をやめなくてはいけないのね。」学校からの帰り道にため息がとまりません。「もっと勉強したいのに...。」

マリアナの住む村ではマリアナと同じ年くらいで多くの女の子が結婚しています。マリアナのお姉さんも14歳の時に学校をやめてお父さんが決めた男の人と結婚し、今はふたりの子どもがいます。マリアナのクラスでも結婚するために学校をやめていった友だちが何人かいました。そして、とうとう、お父さんがマリアナの結婚話を持ってきたのです。

この前、何年かぶりに帰ってきたお姉さんは、ずいぶん変わっていました。「子どもの世話や家の仕事はとても大変で毎日くたくたになってしまう」とお姉さんはマリアナにだけ話してくれました。お姉さんの知り合いには結婚した相手の家族から冷たくされたり、きつい仕事ばかりさせられて逃げ出そうとした人もいます。

でも家族に見つかって連れもどされ、今は家に閉じ込められている、と聞いてマリアナは背すじがぞくぞくするのを感じました。自分はどんな人と結婚させられるのかしら、とマリアナは不安でたまらず、夜も眠れなくなりました。



お父さんはマリアナが15歳になる前に、同じ村に住む27歳の男の人と結婚させようと考えているようでした。マリアナは一度だけ、その男の人を見かけたことがあります。やさしそうな目をした人だと思ったことは覚えています。でもその男の人のことを好きになれるかどうか、新しい家族とうまくやっていけるかどうかはわかりません。何よりも、大好きな学校をやめなくてはいけないことがなくなしくてたまりません。

マリアナは勇気をふりしぼってお父さんに言いました。「もう少し学校に通って、いろいろなことを勉強したいの。」

でもお父さんは「女の子が勉強を続ける必要はないんだよ。マリアナの結婚する人はとてもやさしい人だし、結婚して子どもをたくさんうむことが大切なんだよ。」と、とりあってはくれませんでした。

そんなある日、お父さんは村の集会に出かけました。この日の集会にはたくさんの人が集まっていた。

村長さんは静かにはじめました。「実は、女の子が学校をやめないように村で協力してほしい、という話がきているんだよ。」村長さんは、女の子が教育を受けると子どもをじょうぶに育てられるようになること、マリアナくらいの年で結婚して子どもをうむのは危険で命を失うことも多いこと、女の子もおとなになる前の時間を大切にしなければならないことなど、政府やユニセフから届いたポスターを見せながら話します。

「どうだろう、みんなもよく考えてみてほしい」村長さんの言葉に、お父さんは、マリアナに学校をやめさせてまで結婚させることがよいのかどうかわからなくなってきました。「私がマリアナにしてあげられる一番よいこととは何だろう？」お父さんの足はマリアナの結婚相手に決めた男の人の家に向かっていました。

「ただいま。今日はマリアナにおみやげがあるんだ。」帰ってくるなりお父さんが言いました。「お帰りなさい。おみやげってなあに？」何も持っていないお父さんに不思議そうにたずねました。「マリアナ。それは君が卒業まで学校に行けるってことだよ。」マリアナは突然の知らせにとびあがって喜びました。

お父さんは、村長さんの話をマリアナにも聞かせました。そして結婚相手の家に相談に行ったこと、相手の家族にも村長さんの話を聞いていた人がいてマリアナの希望をかなえてあげてもいいんじゃないか、と言ってくれたことを教えてくれました。

次の日、マリアナのうれしそうな顔が教室をのぞきました。「マリアナ、何かいいことでもあったの？」先生がたずねると、「お父さんからステキなおみやげをもらったんです」とマリアナのはずんだ声が教室にひびきました。

(文・構成：日本ユニセフ協会)



# 10代半ばで結婚する少女たち

ニジェールでは現在25～29歳の女性の実に77%が18歳未満で結婚しています。そして、その相手や時期については、すべて父親が決められています。ニジェールで早婚が多い理由には、昔からの慣習を引きついでいること、コミュニティ内の結束の強化、結婚によらない妊娠を防ぐためなどがあげられます。しかし、早婚はニジェールに限ったことではありません。18歳未満の女の子の結婚、つまり「早婚」に関するレポートが今年3月にユニセフから発表されました。レポートは早婚が女性への虐待やHIV/エイズの感染など、さまざまな問題につながると指摘しています。



UNICEF/Murray-Lee



UNICEF/93-1967/Pirozzi

## 早すぎる結婚の原因・背景

早すぎる結婚の大きな原因は貧困です。女の子を育てることは貧しい家庭にとって負担なのです。こうした場合、年上の男性との結婚が女の子自身だけでなく、その家族にも経済的な余裕をもたらすこととなります。地域によっては、結婚する相手の家から財産の一部を贈られることもあります。また、紛争の続く地域では兵士と自分の娘を結婚させることが「名誉」であり、また一族を守る方法と考えられています。こうした地域では、早い結婚ほど、自分たちの安全が確かになると思われるのです。純潔を守ることが女の子自身を守るという考えから、家族が早い結婚を望むこともあります。



UNICEF/95-1955/Pirozzi

## 早婚がもたらす影響

早すぎる結婚はさまざまな問題を引き起こしています。結婚のために学校をやめ、教育の機会を奪われるため、その後の生活に必要なことを学ぶことができなくなってしまいます。保健・衛生や栄養についての知識が不十分だと、守れるはずの子どもの命も危険にさらされることになります。ニジェールの5歳未満の子どもの死亡率は世界で3番目に高くなっていますが、衛生環境だけでなく、保健や栄養の知識が足り

ないことも原因です。

からだがおとなになりきれていない女の子の妊娠と出産も命の危険と隣り合わせです。妊娠や出産が原因で亡くなる女性は一年間に60万人いますが、15～20歳の少女が出産で死亡する危険性は20歳代の母親にくらべて2倍も高く、さらに15歳未満の少女になるとその危険性は5倍にも高まってしまいます。命をとりとめても、10代前半での出産が原因で、麻痺など障害を負う女性もいるのです。

また、子どもとしての生活を奪われ、幼いうちから結婚生活を強いられる環境の中、虐待にあうケースも多く、精神的に傷つき、男の人が近づいてくることにすら耐えられなくなってしまう場合もあります。

結婚後は女性は貴重な労働力としても期待されます。家事に加え、子どもの世話や、農作業などの労働を強いられるため、肉体的にも精神的にも大きな負担となります。

つらい結婚生活から逃げ出そうとしても、家族に見つかって連れ戻されてしまったり、子どもがいるために逃げるができなかったり、またうまく逃げ出せても自分の家族が家族の恥として受け入れてくれない場合もあります。結婚相手にも自分の家族にも受け入れてもらえなくなった女性は、教育も受けておらず、収入の手段もなく、頼れる人もなく、社会的に非常に弱い立場に追いやられてしまいます。その結果、売買春の犠牲になり、HIV/エイズに感染してしまったり、感染しても気がつかずに人に感染させてしまうことにもつながります。

## ユニセフが支援する女の子の早婚への対策

ニジェールのなどサハラ以南のアフリカの国ぐにと同じように人口増加の激しい南アジアでも女の子の早婚が大きな問題となっています。南アジアの多くで、結婚する女性が相手の家に持参金を持っていく慣習が残っており、親は持参金が安くてすむ若い(ときに幼い)うちに娘を条件のいいところへ嫁がせようとします。

特に早婚の割合の高いバングラデシュでは、ボーイスカウトを巻き込んだ画期的なプロジェクトがはじまっています。スカウトのメンバーの男の子がひとりにつき10軒の家の健康・衛生・子どもの教育状況についてのデータを集めます。情報を提供してもらおうと同時にメンバーの男の子は、女の子の教育の大切さを伝えたり、さまざまな保健の情報などを伝えてまわります。まだ始まったばかりのプロジェクトですが、男の子を通じて女の子の教育の大切さを伝える方法は、女性のみならず男性自身の意識改革にもつながっていきます。

ユニセフは、教育の大切さだけでなく、早すぎる結婚によるさまざまな影響について地域の指導者や宗教的なリーダーを通じて伝えたり、映画やテレビ・ラジオによるキャンペ

18歳未満で結婚する女の子の割合  
(現在25～29歳の女性を対象に調査)

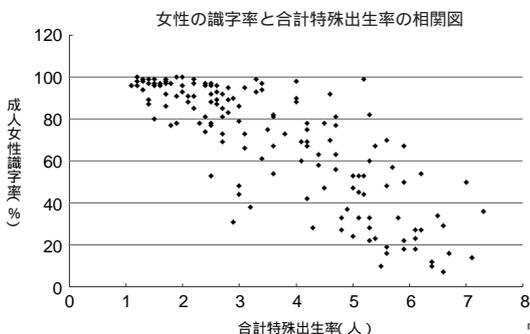
国名	%
ラテンアメリカ	
グアテマラ	39
ドミニカ共和国	38
南東アジア	
バングラデシュ	81
ネパール	68
パキスタン	37
サハラ以南のアフリカ	
ニジェール	77
マリ	70
ブルキナファソ	62
中東	
イエメン	64

(出典: Early Marriage: Child Spouses, UNICEF, 2001)

ーンをおこなったり、わかりやすい劇や歌をつくったりして、社会の意識を変えていく活動をおこなっています。



UNICEF



男性に対する女性の識字率はその国における女性の社会的地位を示していることが多く、女性の識字率が低い国ほど、早婚の傾向も強くなっています。また、女性の識字率が低いほど合計特殊出生率(ひとりの女性が一生に産む子どもの数)や子どもの栄養不良の割合も高いという傾向が明らかになっています。

「2001年 世界子供白書」より

南アジアでは、絵本やアニメーションにミーナという女の子のキャラクターが使われ、意識改革に役がっています。



UNICEF